

優先席では慎重に。

紫李鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

皆さんご存じですよね？優先席ではケータイの電源を切らなくてはいけないことを。

優先席では慎重に。

---

目次

優先席では慎重に。

私たちが毎日、当然のように使っているケータイ。皆さんご存じですよね？優先席では電源を切らなくてはいけないことを。

午後の京葉線。杖を手にした一人の老婆が乗車した。優先席には、ケータイを操作しているヘビメタ風の男が陣取っていた。

老婆は、ヘビメタ風の向かいに座った。途端、

「う〜」

老婆は胸を押さえると、ヨロヨロとヘビメタ風の傍に歩み寄って倒れた。

「げ。な、なんだよー」

ヘビメタ風は咄嗟とつさに腰を上げた。

ザワザワツ……

乗客がざわめいた。

「大丈夫ですかッー」

ストパーの若い女が老婆の傍にやって来た。

「う〜、う〜……」

老婆は苦しそうに唸うなっていた。

声をかけたストパーは、老婆の体に手をやると、シートに寝かせようとした。それを見ていた他の乗客が手伝いに駆けつけた。

「おばあちゃん、大丈夫ですか？」

大学生風の男が声をかけながら、老婆をシートに寝かさせた。老婆は苦しそうに顔をしかめていた。

「ちよつと、おばあちゃんに謝りなさいよッ！優先席ではケータイを使っちゃダメって、知ってるでしょ？アナウンスでも言ってるじゃない、優先席ではケータイの電源を切るようになって」

ストパーに咎とがめられたヘビメタ風は、驚いた様子で頷うなずいた。

「ほらッ、謝りなさいよッー」

へビメタ風は老婆の傍に行くと、

「……どうも、すみません……でした」

ボソボソと呟いた。

「うゝ……」

老婆は尚も苦しそうな顔で胸を押さえていた。

「おばあちゃんに何かあったら、あんたのせいだからね。万が一のために、ケータイと名前、住所と勤務先を教えなさいよッ！」

女の迫力に負けたへビメタ風は、渋々ケータイ番号を教えていた。

当日の夕方、ストパーはへビメタ風に電話をした。

「——おばあちゃんが入院したわ」

「エッ……」

「入院費や慰謝料の請求をおばあちゃんに頼まれたの。ちゃんと払ってくれるわよね？警察に届ける？それとも示談にする？どっちよ？」

ストパーは決断を急がせた。

「じ、示談で……」

へビメタ風は慌てて答えた。

午後の中央線。杖を手にした、一人の老婆が乗り込んだ。優先席に座ると、向かいの席にはケータイに夢中になっているサラリーマン風の中年男がいた。途端、

「うッ」

胸を押さえた老婆がヨロヨロと、向かいのサラリーマン風に歩み寄って倒れた。

「ヒエッ」

びつくりしたサラリーマン風は、咄嗟に立ち上がった。

「だ、大丈夫ですか？」

跪ひびくまいてシートに凭もたれている老婆に、セミロングの若い女が声をかけた。

「うゝ、うゝ……」

老婆は苦しそうに胸に手を当てていた。

ザワザワツ……

他の客がざわめいた。セミロングは、シートに寝かせようと、老婆の体を持った。

「ちよつと、突っ立ってないで手伝ったらツ？」

セミロングはケータイを手にしているサラリーマン風を睨んだ。

「あつ、は、はいッ」

サラリーマン風は慌てて老婆をシートに寝かせた。

「おばあちゃん、大丈夫？」

セミロングが声をかけた。

「う……う……」

老婆は尚も苦しそうにしていた。

「ちよつと、おばあちゃんに謝りなさいよ。あんた、社会人でしょ？優先席でケータイが使えないのは常識でしょ？おばあちゃんに万が一のことがあつたら、あんたのせいだからね。ちゃんと連絡先教えなさいよ」

「……は」

セミロングの迫力に圧倒されたサラリーマン風は、渋々と名刺を出した。

当日の夕方、セミロングはサラリーマン風に電話をした。

「——おばあちゃんが入院したわ」

「エッ！」

「入院費とか慰謝料をおばあちゃんに頼まれたの。ちゃんと払ってくれるわよね？警察に行く？それとも示談にする？」

「示談で」

サラリーマン風は即答した。

駅のトイレ。

「アハハハ……」

セミロングと老婆が高笑いをしていた。

「チヨロいもんよ」

セミロングのカツラを脱いだ方が言った。

「つてか、さっきのサラリーマン、俺のオツパイ触ってやんの。おもちゃの垂れパイ付けててよかったぜ」

白髪のカツラを脱いだ方が言った。

「クツ。今月の儲けもつ、スゴいぜ。成功率100パーじゃん。やめられない、止まらないって奴。よう、今度は何線にする？」

セミロングのカツラを脱いだ、茶髪のシヨートが聞いた。

「てか、老婆役、代わってくんねえ。腰曲げんのマジ疲れんだけど」

白髪のカツラを脱いだ、黒髪のシヨートが不平をこぼした。

「いいよ。じゃあさ、こうしよう。来月は俺が老婆で、お前が助け役と交渉役」

化粧を落しながら、茶髪が提案した。

「……か。交渉はお前の方がうまいもんな。やっぱ、老婆役でいいかあ」

ブラウンのアイブローで描いていたシワを拭き取りながら、黒髪が諦あきらめた。

「だろ？はい、これ。さっきのサラリーマンが会社に内緒にしてくれて、くれた金を折半した分」

茶髪が金を渡した。

「サンキュー。今度さ、脚本変えてみねえ？」

「例えば？」

「例えば、……親子同士とか、老婆同士とか」

「いいよ、別に。けど、老婆同士だと、シワ描くのめんどいし、これまでどおり、若い女役でいいよ」

「自分ばっか楽しんでからに」

「それより、明日は登校しようぜ」

「オツケー！じゃあな」

「バイバイ！」

着替えを終えた高校生の男子二人は、各々の自宅に帰って行った。

おしまい。ジャンジャン！